

早大図書館占拠闘争の軌跡

編集部

はじめに——解説に代えて——

もう二年も経ってしまったているが、一九七二年十一月初めに、東京大学構内に学生の死体が遺棄されている事件があり、マスコミ・ジャーナリズムによつてかなりの紙面が提供された。いわゆる『川口大三郎君虐殺事件』である。

川口君の虐殺を一つの契機としたかのごとく、革共同両派の党派間抗争は以後混乱を極め、今日に至っている。『敵は殺せ』という根本姿勢については、川口君虐殺を行つた革マル派にしても、自派へのテロルに対する報復を公言した中核派にしても、変化してはいないし、むしろその方針と個別戦術はエスカレートしていつており、そこには、組織の防衛と確立こそが運動の拡大・深化をもたらしという、すなわち党の建設が運動の建設であるという誤謬の裏が

えしの組織防衛のみがあるにすぎない。だが、守るべきは組織ではなく運動であるのだ。

まさに川口君の虐殺を契機として、もう一つの事態の流動が起つた。それは、川口君の属していた早稲田大学における大学当局と革マル派による管理支配体制の粉砕を志向する運動の拡がりであつた。大学当局及び革マル派あるいは民青（法学部を拠点とし、法学部自治会を称する）との長い闘いの中で、各学部に新執行部をもつ自治会が創出されていった。これらの運動の基盤となつたものは、各学部の行動戦線と称する運動体やサークル連合であつた。

しかし、革マル派（又は民青）との二重自治会というパターンに対し、大学当局は自治会費の凍結を経て既存自治会（すなわち革マル派）の温存をはかり、この間革マ

ル派は行動戦線や新執行部に暴力的に対峙し、社青同解放派や中核派、叛旗派等の介入に対し一貫した戦略を持ち得なかつた行動戦線・新執行部は消耗をしいられたのである。

早稲田大学の特色は、六六年及び六九年の早大闘争を通じて明らかにされ、また強化された大学当局の学生支配の狡智と、七〇年闘争に勢力を温存しえた革マル派の反革マル抑圧が結びついたところにあつた。

この管理支配体制に対する大衆叛乱は、川口君の死を契機として燃えさかつたが、相手を焼きつくすことのないまま勢いを弱めたのである。その原因は、大学当局の「時間さえ稼げれば」という対応のうまさをはじめ、諸々のことがあげられるであろうが、最終的には革マル派の組織された暴力力に対して運動体として拮抗して行く持続力を持てなかつたところに戦術的な敗北があつたと見てよいのではないだろうか。

ここに紹介する文章は、川口君虐殺後一年を経過した七三年秋に、持続的な力を失いかけていた大衆叛乱をしり目に、大学当局と革マル派との間で行なわれようとした『早稲田祭』と呼ばれる革マル祭の中止と

総長団交を要求して、私学最多の蔵書量を有する早大図書館を占拠し、現在東京地裁において公判中の建造物侵入事件の被告となっている11人の被告団の、冒頭陳述の抄出である。この《図書館ジャック》闘争を最後に、早稲田大学では革マル派と当局に対する公然とした闘いは組まれておらず、この闘争から一年を経た現在、再び《早稲田祭》の名の下に革マル祭が開かれようとしている。早大での運動をほとんど形成しえない革マル派が、組織として残っているためにこのような《敗北》がもたらされているのである。彼ら叛乱大衆の敗北を敗北として終らせないためには、運動の持続とは何かを説明することが必要となるであろう。

資料1

早大に図書館ジャック

十九日午後八時ごろ、東京・新宿の早大（村井資長総長）で、黒ヘルメットの学生十四、五人が正門から構内に侵入した。学生らは正門わきの図書館（一部七階建て）にたてこもり、屋上からマイクで、大学に対し、早稲田祭の中止と総長団交を要求、

これに対し、大学側は、「学外へ出なさい」とマイクで再三にわたり警告、警視庁機動隊と戸塚署員約百人も学内外に待機した。だが、学生らは、屋上から図書館の本を投げたりして抵抗、このため同九時すぎ、大学の了承を得て機動隊員が図書館に入り、二十日午前零時ごろ、四階の書庫に閉じこもっていた学生ら十四人を不退去罪で逮捕した。

早稲田祭はこととして二十回目を迎え、今月二十二日から二十六日まで行われる予定になっているが、実行委員会を革マル派が握り、反革マル派の学生が「革マル祭粉砕」と反発していた。また、さる五月八日、反革マル派の同大黒ヘル集団が授業中の村井総長を連れ出し、総長団交を行ったが、その際、同月十七日に団交再開を総長が確約したものの、その後、内ゲバによる混乱を警戒して、総長は団交を中止したといういきさつもあった。こうしたことから戸塚署では、この日の学生らは反革マル派とみている。

資料2

第二次早大闘争の敗北以後、ワセダの闘いとは、当局―革マル―日共民青三位一体となった学内管理支配体制との闘いであった。すなわち、全共闘学生叛乱によって学園管理支配の危機を経験した権力が同じく全共闘運動のダイナミズムの中に60年代全学連運動―党派全学連運動の最終的破産に直面した革マルを学内の代行権力として、管理支配構造に繰り込んで延命させることをもって維持された学園管理支配秩序に対する闘いであつた。それは、自立大衆による抵抗運動として表現されるものであつたろう。

我々が確信するものは様々な組織表現をもつてなされるところの「政治」ではなく、「抑圧」の日常から決然として自立し、黙々とした大衆の実践力の確かさである。それは、当局、革マル、民青がいる限り永続的に持続してゆくものである。

自立した学生大衆はこの一年間に、「ワセダの秩序が崩壊か」の択一をもつて包圍している権力、当局、革マル、民青、右翼、マスコミとの闘い、そして「対革マル宗教戦争」の中に喪なわれた「党―大衆」の延命をみようとする諸党派の党派闘争路線と

の闘い、その他様々な夾雑物との闘いを着実に越えてきた。そして「ワセダの闘い」が一つのエピソードとして既に燃え尽きたもののように語られている現在も、華々しく知られることはなくとも、確実に敵の心臓部をねらい続けているのである。どこが頭とも足ともつかない無名大衆による抵抗運動がほとんど確実な叛乱の予兆をもつて持続しているのである。当局、革マル、民青は、もはや11・8がなかったかのような安寧を取戻すことは出来ないだろう。我々はワセダを叩きつぶすまで虐殺者に決着を迫るまで闘い続けるだろう。

11月19日夜、図書館を占拠し、蔵書二百万冊とひきかえに「革マル祭」の中止と総長団交を要求した学友の闘いは、暴力的に中断されたが、これは終りではなく、そのような学生大衆の本格的な始まりの烽火にすぎないのだ。今後もしたかな自立大衆は敵の口を見習って手段を選ばず抵抗を持続してゆくと、敵は名もなく形もなく出沒するゲリラにおびえ続けすべてを灼き尽くす叛乱の予感におびえ続けねばならないのだ。

〔注〕資料1、2とも早大11・19図書館占拠闘争救援会の発行したビラによる。資料1は読売新聞の記事であり、資料2は救援会自身の文章である。次の被告冒陳を補足する一助として収録した。なお、本来は数名の被告の冒陳を抄出するつもりであったが、紙枚等の関係から、1名の冒陳を全文収録することとした。また、この記事の構成上の責任はすべて編集子にあることを明らかにしておく。

当被告団の冒陳は、被告団と救援会で構成されている早大11・19図書館占拠闘争公判対策委員会発行の「光る風」6号と7号に収録されており、次の冒陳はそれを転載したものである。

被告冒陳

強固な大衆総武装の実現を以つて早大闘争の深化を克ち取れ

東拘4219号

11・19早大図書館占拠闘争とは、まさしく一年有余に亘る早大の大衆的な運動管理―支配体制解体へむけた闘いを葬り去らんとする権力―当局―革マルの「秩序化」策

動、即ち第3次早大闘争の「終了宣言」としての早稲田祭Ⅱ虐殺者の祭典を粉砕し、又5・17逃亡を許さず全学総長団交を実現することを実態的な獲得目標として遂行された闘いである。虐殺の日常性がある限り、大学立法の施行を基底とする69年10・27告示、72年11・17告示によって示される学内管理支配の強化、具体的には検問―ロックアウトの強化、第2学生会館の管理運営権のはく奪、自治会解体攻撃（自治会未承認・自治会費凍結）、治安維持的な警察力導入体制等を以てする管理支配秩序が存在し続ける限り、早大学生大衆の自立した実践力の全てをかけた抵抗運動は持続していくであろうし、又現実的には国家（司法・警察）権力による早大大衆運動への敵対を暴露しつつ展開されているのである。

11・19の突端的な闘いを闇から闇へと葬る為に国家権力の暴力装置を導入して、闘いそのものを権力に売り渡した当局の意図は、管理支配暴力を最大限駆使して、大衆的な闘いを沈静化することに一切があるのだ。この当局の行為こそ川口君虐殺に際して、かたくなに固持していた管理者の態度の発露であり、一年有余に亘る闘いの過程

で終始我々の闘いを評価しているかの如くふるまってきた態度・行動が如何に欺瞞的なものであるかが立証されよう。

我々は一年有余の闘いの経緯を明らかにしていく中で、我々の闘いの正当性を明らかにしていく所存である。そして、同時に行動者として自立した実践力の全てを賭けて管理支配秩序を撃ち続けていくことを意志表示していくものである。

72年11月8日早大一文学生川口大三郎は、一文執行部(革マル)によって「中核派のスパイ」―「集会におけるスパイ行為」のでっち上げ事実に基づき自己批判要求の名の下に、数時間に亘る鉄パイプを使つてのメッタ打ちによつて殺害された。自治会執行部が自治会員を殺した意味は大きい。68年69年、東大・日大を先頭とする全共闘大衆の叛乱によつて大学管理支配体制の危機を経験した権力―当局は、学園に封じ込めたセクトを管理支配体制の一環にくり込み、常時管理しつつ、学生大衆の管理を大衆的偽装をとげたセクトにやらせようと目論んだ。

69年時子山管理支配体制打倒／学館解放のスローガンの下に遂行された第2次早大

闘争が国家権力―機動隊に暴力的に圧殺されて以降、10・21告示によつて示された学内管理支配の強化方針とあいまって革マル(と日共Ⅱ民青)の学生支配が復活していく。全共闘運動の高揚期において、運動―闘争基盤たりえなかつた自治会を基盤として革マルは事実上自治会運動が解体していく状況の中で権力―当局と一体となつて、闘争を收拾せんとした。

無数のテロル、リンチによる負傷者、梁政明(山村政明)君の革マル暴力支配に対する抗議焼身自殺、川口君虐殺等の現実、革マルの恐怖政治の凄まじさを物語っている。革マルは川口君虐殺という窮極的危機状況に直面して、たかだか私的暴力性Ⅱリンチ、なぶり殺しの論理でしかない「党派闘争の論理と倫理」なる庇理屈を以つて犯罪的暴挙を陰蔽しようとした。一方当局は川口君虐殺を不測の事態として、信じがたい遺憾の意を表しつつ、根底から揺さぶられた早大管理支配体制の強化に狂奔した。一文における自治会執行部(革マル)の一方的退学処分、自治会費凍結、自治会室の使用禁止等の「正常化」策動こそ、事態の解決はおろか、学生自治の弾圧を至上目的

とする当局の醜惡な抑圧者としての実態を表現して余りあるものである。

我々は、たとえ当局が権力―機動隊の暴力を背景に管理支配強化に腐心しようと、虐殺の張本人―革マルが「一部未熟分子」の「ハミ出し行為」、「誠実な自己批判」表明と証する怪文書によつて「教訓化」するなどとうそぶこうとかかる政治的利用、政治的のりきりを断じて許すことはなかつた。数千の学生によつて克ち取られた11・13・14徹夜糾弾／早大解放の直接行動は自治会員が自治会執行部に殺されざるを得なかつた代行制度の克服を根底にすえつつ、11・27の一文学生大会を皮切りに各学部学生大会の開催革マル執行部リコール、臨時執行部の樹立へと向かつた。

年を経るに従い、川口君虐殺をめぐる早稲田の大衆状況はより流動していった。状況の流動化は、本質的な形で、学生の存在的日常に接触する形で、現実的矛盾をより一層明確に浮き彫りにしていく。△反暴力▽に象徴される一般的な暴力否定論が、実は管理支配秩序から行使される(する)暴力、或いは秩序維持の為の制度的暴力(警察)暴力の

(八六頁に続く)

(四八頁より続く)

存在構造を掌つことを欠落した処から成立していたことは明らかである。および反暴力V主義者、一般的暴力否定論者が管理支配構造にくり込まれ、学生大衆の政治アパシーを助長させていることは明らかであるし、権力ー当局の恣意的な「内ゲバ」デマゴギーの乱発、その回避の絶叫から、警察暴力ー機動隊の導入を合法化する反動的意図に対して、実体的な反撃を展開することは不可能である。

我々は、1月8日革マルの本部前集会というハレンチ行為を粉碎すべく、銅像前集会を実現した。そして、「ヘルメットをかぶることは闘いを分断することになる」として悪臭ふんぶんたる政治主義をむき出しにした日共民青の自治会のつとりずなわち川口君への冒瀆を激烈に批判すると共に、闘いの中での改良が反動になり変つていくことを明快に立証していった。革マルはともあるうに下部活動家に歪曲した事実を認知させひたすら「党派闘争」化することをお願い、私的暴力性Hリンチ、なぶり殺しの論理を唯一のよりどころとしつつ、全国動員のテロル部隊を以って1月19日文

連総会をデッチあげていく。だが、しかし我々は、11・80連を先頭とした直接行動を以て、数千の学生大衆の力を結集して実力粉碎していった。革マルを秩序構造の中にくい込み、管理支配暴力を許容することで、学生大衆を管理してきた権力ー当局の意図は、大衆の暴力性の発現によって、自身の目の前で破綻していった。事態に驚がくした大学ー当局は教育者の仮面をかなぐりすてて、暴力による大衆の抹殺を企図した。「正常化」策動としての検問・ロックアウトが行なわれる中で、革マルの全国テロル部隊が何なくそこを通り抜け、学生大衆の背後から闇打的に襲いかかり、おびたらしい流血と負傷者を生み出すに至った現実を大学・当局は一体どう考えているのか？我々にかかる権力ー当局ー革マルの醜いゆ着を満天下に明らかにし、弾劾する。

その後、1月20日以降当局は後期試験の正常な消化の為と称して、早大・学生大衆の自立的運動展開を消去せんとした。我々は当局のなじくずしの自治会未承認の態度を批判し、当局への弾劾抗議に向つた政経学友15名の不当逮捕といった激しい弾圧をはねのけつつ、1・22政経ストをはじめと

した圧倒的な大衆ストライキを以って反撃していった。政経・一文・教育・社会等のうち続く学生大会成功、ストライキ案採択、全学ストライキ体制構築に向けての退路なき進撃は、単に権力ー当局ー革マルの大衆抑圧に対するアンチ・テーゼにとどまることなく、自らの理念形成、主体性の捉え返しの内に、早大の日常をおおっている社会構造の仮構性を透視し抜く戦闘の回路を見い出さんとしたのである。学生大衆の「自ら討議し、決議し、執行する」という原則の貫徹はきわめて創造的、流動的であった。

我々は暗中模索の連続の中で「革命党派」の斯喩を暴き、そして、「革命党派」の死語と化した「革命的言辭」に翻弄された自らの脆弱性を大胆に克服していく契機を開削せんとしたのである。自主講座、自主ゼミの設置、女性解放の闘いを推し進めている人々との交流等の創造的活動や、自治会即時無条件承認要求学館管理運営権奪還の当局に対する執拗な追求行動により、我々は後期試験の正常な実施をタテに闘争を沈静化せんとした権力ー当局の意図を凌駕しつつ、さらにストライキ体制を強固に打ち固めていった。我々は対当局、対革マルの

闘いの徹底化の中で政府ブルジョワジーからかけられてきた中教審、大管法等に見られる教育再編の攻勢を断ち切る方途を展望しつつ邁進していったことを銘記しておく。

2・3月のストライキ闘争以降、半年に及ぶ闘いを葬り去る場として当局が設定した入学式を、「正常化策動としての入学式を総長糾弾／新入生連帯集会へ」のスローガンの下、我々は4・2入学式を粉碎した。4・2闘争の貫徹は我々の敵対者が恐怖し、憎悪するものであるが故に暴力的圧殺を企ててきた。4・4 16号館、4・10代々木駅頭という鉄パイプ白色襲撃によって40数名の学友が無防備の状態の元に頭を割られ、手足を折られるという惨状を生み出した。

我々は当局の秩序化策動、革マルのテロル部隊の暴虐をはねのけつつ、全学ストライキ体制構築―全学総長団交実現の指標のもと運動を持続させていった。遂に川口君虐殺半周忌の当日5・8に我々は学生大衆の前に総長村井を引きづり出し、川口君虐殺に際しての学生弾圧(11・17告示に表象される)の自己批判要求、自治会即時承認要求、学館管理運営権奪還等々を実現すべ

く総長団交を貫徹した。学生大衆の圧倒的攻勢のもとに総長村井―大学当局は、5・17再団交を確約せざるを得ないところまで追い詰められていった。

権力―当局―革マルは学生大衆の英雄的行動の前に、管理支配体制の台座が根底から震撼せしめられたことに恐怖し、あらゆる圧殺策動を試みてきた。5・17総長村井―大学当局の逃亡、革マル派全国テロル部隊の学内戒厳令、権力機動隊のリンチ・デモの強制、2名の学友の不当逮捕等は、我々が早大管理支配体制を可視化しえた証左であり、又我々の敗北である。学内から追放された学友は早稲田に執着することによって闘いの源泉を開化させんと、5・17以降、早稲田祭実行委の結成、自治会執行部確立をめざして、苦しい闘いを遂行してゆく。7月以降長い沈滞期を耐えつつ、早大学生大衆は川口君一周忌の闘いの高揚に向けて精進していった。当局はリコールされた(社会・商)革マル自治会執行部に自治会費を横流しし、同様にリコールされた早稲田祭実行委を認可し、早稲田祭Ⅱ虐殺者の祭典の実現によって第3次早大闘争の「終了宣言」を発せんと画策した。

革マルは全国部隊をくり出し、11・8川口君一周忌追悼集会なる大茶番をやつてのけ、当局との醜悪な慣れ合いのもと、権力―当局に包括され、許容された枠の中で権力維持に腐心した。一方、革マルの11・8川口君一周忌追悼集会を実現せんとした学友は、よりよく闘いの展望を明確にすることができず、安定化した早大管理支配体制への実体的攻撃を展開することをなしえなかった。

我々は改めて川口君虐殺が革マルの学生支配と云う日常活動の必然的帰結であり、突発的なことなどでは断じてないし、又管理支配の強化の中で川口君の死が必然化されたことを認知すべきである。そして一年有余に亘る闘いの中で、おびただしい流血と無数の犠牲を強いながらも苦闘の連続の中で、確固たる抵抗陣型を作りあげたことを確信すべきである。川口君一周忌をめぐる闘いは早大管理支配体制の可視―不可視の暴力を永遠に葬っていく闘いの永続化の内に、唯一闘いの根拠を見い出せるものであることを証左した。まさに虐殺者の祭典Ⅱ早稲田祭中止、全学総長団交実現の二大スローガンを掲げて我々が展開した11・19

早大図書館占拠闘争はその実践的思想的模索であり、したたかな学生大衆の抵抗運動の持続的過程であり、絶え間ない大衆叛乱の予兆でもあるのだ。以って我々は早大闘争の正当性を確信し、権力の不当逮捕、不当起訴を弾劾するものである。

最後に我々は川口君虐殺の真実を全ゆる手段と方法を以って明らかにしていくと共に管理支配体制との激突―解体を目指して不断に抵抗運動を推し進めていくことを宣言する。強固な大衆総武装の実現を以って断固として早大闘争の深化を克ち取れ！

編集後記

▽『リベロー』創刊いらい5号目、そして『アナキズム』となつてから3号目をむかえ、一応「三号雑誌」の任務も無事終えた。かつまたこの一年間のしめくりとして、本号は『アナキズム』にとつて一つのサイクルの終焉を意味し、新たな出発点、新しいサイクルの始点への回帰でもある。

同人制への移行と平行して、新しい編集スタッフによる発行体制も遅々としてではあるが確立されつつある。こうした時点では

二年目をむかえようとする本誌は、内容的にも新生『アナキズム』との橋渡しとなる重要な意味を持つている。さて、本号はそれに答え得るや。

(M)

▽自分は△アナキスト▽ではない、と思つているためか本誌の誌名には抵抗があるものの、編集スタッフに参加してしまつた。

というのも、現在の総体的な運動の低迷と停滞の中では、まずもつて運動の基盤を形成すること、その素材を提供することがアナキストか純粋無党派かの自己弁別よりも重要であることを認め、また本誌が、アナキストにとどまらず無党派の運動者たちに、運動創出のための基盤の形成に必要な△何か▽を提供することに努力しているのを認めたためである。

とはいえ、その目的を達成するには、余りに個人の力は弱く、また編集スタッフ総体としても不十分な点が多々あるために、今号においても目的が十全に達せられてはいない。読者諸賢の御批判・御叱正をおおき、その中から一歩ずつでも目的に近づきたいと思つている。読者の御協力をお願いする次第である。編集部にはげましのお便りを出そう！

(ケイ)

誌代改訂について

印刷費の赤字のため、やむなく本誌五号より、誌代を一部三五〇円に改訂いたします。読者諸兄の御了承をお願いします。

定期購読料 年間(四号分送料含み 一五〇〇円 (すでに申し込まれて いる分については従来通りといたします)

編集部

アナキズム 五号

発行日

一九七四年十一月二〇日

発行所

日本アナキズム研究センター

静岡県富士宮市杉田二五一

編集部

東京都文京区本郷一―二四―七

現代思想社内 越境の会気付

アナキズム編集委員会